

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009 ～ 2012

課題番号：21390207

研究課題名（和文） がん患者のニーズに基づく多職種コラボレイティブ・ケア・アプローチの開発

研究課題名（英文） Development of novel multi disciplinary collaborative care program based on cancer patients' perceived needs

研究代表者

明智 龍男（AKECHI TATSUO）

名古屋市立大学・大学院医学研究科・教授

研究者番号：80281682

研究成果の概要（和文）：本研究では、がん患者のニーズを元に、看護師が中心となり、適宜他の医療スタッフと連携をとりながら患者の個別的なニーズに対処する介入法を開発し、その有用性を検討した。対象は術後乳がん患者とし、27名の参加を得た。最も取り扱われる頻度が高かったニーズは再発不安で46%であり、家族との関係23%と続いていた。介入前後のアウトカムの比較においては、再発不安（ $P=0.19$ ）と医療に対する満足感（ $P=0.18$ ）に関しては有意な変化はみられなかった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study were to develop the novel multi disciplinary collaborative care program facilitated by nurses based on cancer patients' perceived needs and investigate its preliminary usefulness. Total of 27 breast cancer patients participated in the program. The most common patients' needs was fear of cancer recurrence (46%) followed by difficult relationship with their family members. Patients' fear of cancer recurrence ($P=0.19$) and satisfaction with received medical care ($P=0.18$) were not statistically changed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	4,900,000	1,470,000	6,370,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：社会医学・公衆衛生学/健康科学

キーワード：がん、ストレス、多職種ケア、ニーズ

1. 研究開始当初の背景

| これまでのがん患者の精神的ストレスに対

する介入研究の結果を概観すると、わが国のがん患者の多くに強い精神的ストレスが認められることが明らかにされている一方、確立された標準的な介入方法、支援システムは存在しない。さらに、先行研究からは、がん患者の精神的ストレスを効率よく軽減する介入としては、患者の個別的ニードを念頭においた新たな包括的治療戦略の開発とそれを提供可能にするためのシステムが必要であることが示唆される。がん患者のニードを把握することの利点は、ニードが患者自身の支援の必要性和その程度を直接的に反映していることにある。

2. 研究の目的

本研究では、患者ニードの把握に基づいた個別的な包括的ケアを提供可能とするような支援システム、中でもわが国の医療システムを考え、看護師と医師との協働による、多職種コラボレイティブ・ケア・アプローチを開発することを目的とした。

3. 研究の方法

2010年度までに、がん患者のニードの評価方法である The short-form Supportive Care Need Survey (SCNS-SF34) の日本語版を back translation にて作成し、因子分析や内的整合性の検討など計量心理学的に信頼性・妥当性の検討を行った。

2011年度は、SCNS-SF34 を外来通院中の乳がん患者 408 名に実施し、多変量解析にて満たされていないニードの関連要因を検討した。

最終年度は、SCNS-SF34 を用いて抽出された乳がん患者のニードを元に、多職種によるコラボレイティブ・ケア・モデルとして、看護師が中心となり、適宜他の医療スタッフと連携をとりながら、患者の個別的なニードに

対処する介入法の有用性を検討する臨床試験を実施した。その際の主要評価項目に関しては、乳がんのサバイバーにおいて最も頻度が高い精神的ストレスである再発不安とし、副次的に感情状態や QOL についても評価した。具体的に以下にこれら評価方法に関して記した。

再発不安: the Concerns About Recurrence Scale (CARS) 日本語版を用いた。CARS は、30 項目から構成され、乳がん患者の再発に対する脅威を測定するための尺度である。全体的な再発脅威についての 4 項目に加え、下位尺度としては、将来の治療や生活、情緒的苦痛、身体的な健康に関連する Health Worries、セクシュアリティ、生殖、女性らしさに関連する Womanhood Worries、役割に関連する Role Worries、死の脅威に関連する Death Worries がある。本研究では、全体的な再発脅威についての 4 項目 (Overall Fear) を評価項目として使用した。

感情状態: Profile of Mood States (POMS) を用いた。POMS は 65 項目からなる自記式調査票であり、一時的な感情状態を評価するための尺度として広く利用されている。緊張-不安、抑うつ-落ち込み、怒り-敵意、疲労、活力、混乱の 6 つの感情を測定することが可能で、日本語版による信頼性・妥当性も確立されている。回答は、「まったくない」の 0 点から「非常に多い」の 4 点までの 5 段階で行い、点数が高い程心理的苦痛が強いことを示す。

QOL: European Organization for Research and Treatment of Cancer QLQ-C30 (EORTC QLQ-C30) を用いた。EORTC QLQ-C30 は、がん患者の生活の質を評価するために開発された世界で繁用されている自己記入式の QOL 調査票である。本調査票により、日常生活における 5 つの活動性 (身体的、役割、認知的、

精神的、社会的)、8つの身体症状(倦怠感、悪心・嘔吐、痛み、息切れ、不眠、食欲不振、便秘、下痢)、経済状態および総括的なQOLを評価可能である。今回の検討に際しては、総括的なQOLスコアのみを解析した。

4. 研究成果

The short-form Supportive Care Need Survey (SCNS-SF34)の日本語版は、ほぼ原版本様の5つの因子構造が再現されるとともに、5つの下位尺度のクロンバックアルファ係数は0.85以上であった。また、全体のニードの高さと心理的苦痛、生活の質(QOL)の間に中等度以上の有意な関連が示された。以上より、SCNS-SF34日本語版は高い信頼性、妥当性を有することが示され、本邦でも使用可能であることを確認した。

SCNS-SF34を外来通院中の乳がん患者408名に実施した。対象者の背景は、年齢の中央値55歳(範囲27-89歳)、婚姻状態にあるもの76%、高校以上の教育経験を有するもの38%、パートタイム/フルタイムの雇用状態にあるもの45%等であった。また、臨床病期に関してはII期が最も多く36%、それにI期35%、再発15%と続いていた。満たされていないニードの関連要因を検討した結果、雇用状態(フルタイム/パートタイム以外)、がん診断から6カ月未満、進行した病期、身体的機能の低さが有意な要因であることが示された。またニードは、心理的苦痛(Hospital Anxiety and Depression Scaleで測定)と生活の質(European Organization for Research and Treatment of Cancer QLQ-C30で測定)に有意な関連(各々相関係数とP値 $r=0.63$, $p<0.001$ / $r=-0.52$, $p<0.001$)があることも示された。

最終年度は、術後乳がん患者で化学療法あるいは内分泌療法受療中の成人患者を対象

とし、ニード情報を元にしたコラボレイティブ・ケア・プログラムを実施し、最終的に27名の参加を得た。対象者の平均年齢は 55 ± 10 歳(範囲32-72歳)であり、78%が既婚者、93%が12年以上の教育経験を有し、22%がフルタイムで就労していた。がんの臨床病期はII期が最も多く52%を占め、I期の37%が続いていた。がん治療に関しては、抗がん剤治療を受けているものが最も多く78%であり、内分泌療法55%、ハーセプチン12%と続いていた(重複回答)。

実際の介入テーマは患者との話し合いで決定されたが、平均1.6個、中央値で2個のニードが取り扱われた。最も取り扱われる頻度が高かったものは再発不安で46%であり、家族との関係23%、がん治療による副作用20%、疼痛20%、医療に関する情報17%、復職に関する内容10%等と続いていた。原則として介入(面接)の回数は計4回とし、介入を通して自身のニードの解決に結びつくような問題解決技法が学べるような内容も含めた。

介入前後のアウトカムの比較においては、再発不安($P=0.19$)と医療に対する満足感($P=0.18$)に関しては有意な変化はみられなかった。一方、一部感情状態(POMSにおける活力、混乱)やQOLについては有意な改善が認められた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Akechi T, et al(著者10名、筆頭). Patient's perceived need and psychological distress and/or quality of life in ambulatory breast cancer patients in Japan. *Psychooncology* (査読有り) 2011 May;20(5):497-505. DOI: 10.1002/pon.1757.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

明智 龍男 (AKECHI TATSUO)

名古屋市立大学・大学院医学研究科・教授

研究者番号：80281682

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

縦野 香苗 (MOMINO KANAE)

名古屋市立大学・看護学部・講師

研究者番号：40335592